

10

process in
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35の存在を考察する。



15 年前、U-30 として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家と、出展者の一世代上の建築家が議論を交わし、あらたな建築の価値を批評し共有するために召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として全国の地方区分で影響力を持ちはじめ、新たな活動を始めていた建築家・史家である、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志や、九州地方の塩塚隆生など、中部と四国を除いた、日本の 6 地域から集まった。そして開催初年度に登壇した、三分一、塩塚など 1960 年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに 1970 年代生まれの建築家・史家が中心となる。3 年後の 2012 年には、8 人の建築家（五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、2013 年より、芦澤竜一、吉村靖孝、2021 年より、永山祐子）と 2 人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）によるメンバーでの開催を重ねてきた。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約 10 年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下である出展者の新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、10 名が集まった 4 年目の開催の時期に、藤本の「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守るメンバーが位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家と出会ったのは開催前年度の 2009 年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に向向き、27 組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等、代表する出展者 7 組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残し、自薦による公募を開始しつつ、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、応募少数であったことから、オーガナイザーを務める平沼が担当し、書類審査による一次選考と、面接による二次選考での二段階審査方式で行った。また海外からの応募もあったことから 2011 年の出展を果たしたデンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また他薦での出展者は、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり 1 年目は完全指名、2 年目の 2011 年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催 5 年目の 2014 年、初代・審査委員長を務めた石上が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交わされるようにと、展覧会の主題で

あった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 10 年経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考となり出展者の年齢が 35 歳以下とした翌年の開催である 2015 年。公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、はじめてのゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」と評した。しかしこのことで大きく景気づけられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」を、隔年で設定するアワードとして追加し、それぞれの副賞として翌年の出展シード権が与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの応募年齢の変更を含め、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けていくのが、本展のあり方ようだ。2019 年には 10 年目の開催を終え、基盤を醸成しつつあった本展が、あらたな 10 年を目指そうとした 2020 年、コロナ禍という大きな試練を迎えたが、その後 22 年までの開催危機を乗り越え、昨年ようやく通常開催が可能となり、本展は今年で 15 度目を迎えた。

2021 年より永山祐子を加えた、出展者の一世代上の建築家・史家 10 名が一同に揃うシンポジウム後に場を設け、来年、開催 16 年目を迎える今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年より第 1 回目の開催をはじめ、本年、第 8 回目の「10 会議」を開催した。



—— 皆様 4 時間にわたる取り組み、おつかれさまでございます。例年通り、ゴールドメダル授与後、「祝杯のビール」をガマンしていただきまして、これから 60 分間。この開催が継続するエンジンのような恒例の「10 会議」をはじめさせていただきます。この会議は、出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたメンバー 10 名が一同に揃うシンポジウム開催後に場を設け、次の 10 年後のプログラムを議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけて毎年開催しております。一周して昨年、二度目の審査委員長を務められた平沼先生、本年、審査委員長を務められた永山先生、そして来年の審査委員長を務めていただくことになった藤本先生を中心に、第 8 回目の「10 会議」を開催いたします。開催当初より本展のファウンダーとしてオーガナイザーを務めてくださる平沼先生、本日も進行と補足応答をどうぞよろしくお願いいたします。

（一同）どうぞよろしくお願いいたします！

—— 15 年目の U-35 2024 記念シンポジウムをただ今、終了させていただきました。まずは出展者の選出から大変悩まれ、先ほど GOLD MEDAL を授与いただきました永山先生より、今年の出展者を振り返り、選出時からゴールドメダルの選考に至った思考の経過と印象をお聞かせください。

永山：ありがとうございます。まずゴールドメダルに選出したガラージュの提案は、応募の時点から一番、力強かった。もちろん昨年の展示もそうですが、彼らは本当に三者三様に役割をうまく果たしていて、多角的に建築を展開できる力を持っている印象です。地域で提案する時には、そのコンセプトをどれだけ持続できるのが重要ですが、そんな中でも今回、百年という時間軸を打ち立ててきていて、また凄いことを言うなと思いました（笑）。

一同：（拍手）

永山：いずれにしてもチャレンジングですよ。先ほどのシンポジウム中の全ての受け答えの中で「建築を信じている」のだということを感じました。建築を使って高みを目指すという意志を感じとれただけではなく、ストレートに、真摯な姿勢がやっていることに表れているというところが圧倒的でした。最後に一番私が伝えたかった信仰心という話ですが、現代における信仰とは恐らく永遠のテーマであり、それを建築で探そうとしている。彼らから未来を感じました。

——— ありがとうございます。そして来年、2025年の審査委員長を務めていただく藤本先生から、本日のご感想と来年の応募者に向けてのメッセージをお聞かせください。

藤本：まず本年、永山さんが選出された出展者はとても素晴らしかったですね。永山さん、本当にありがとうございます。昨年からの傾向はありながらも、様々に建築というのとは何か、という問いをポジティブな意味で探し求めている、揺さぶられるのです。そんな意味でも今日はすごく面白かったですし、永山さんや五十嵐淳さんも仰っていたように、今社会が信じられるものは、資本主義経済であったり、環境やサステナビリティなど、それらであるかのように言われています。それらも大切なことではありますが、それだけではないというところを、自分たちで探し求めようとする姿勢がとてもかっこいいと思いました。皆探しているのだけれど、中でもガラージュが一番力強く探し求めようとしていて、実際に行動に移しているというところが本当に素晴らしかったです。僕らも頑張らないといけないなという気持ちになれましたし、励まされたと言うか、刺激を受けました。建築にはそれだけの力があるのだということについて、既に確立された建築を批評するだけでなく、何か探し求めていこうよという力強いメッセージにもなったと思います。だから来年の応募者にはさらにその上に行くものを求めたい（笑）。継続した開催をここにいるこのファウンダーが毎年継ぎ見守っているのですから、出展を目指す方々も決して一過性のイベントとして考えるのではなく、培われた15年間の積み上げの先に繋がる提案を示してもらいたいのです。こちら側から投げかけたメッセージに対する更なるリアクションで、僕らをもっと驚かせてくれたり、あらたな価値に気づかせてくれるような自身の活動を通じた提案で応募してきてくれると嬉しいです。そういう議論が年々継続していくのが楽しみです、今年の出展者は知らない方が大半だったのですが、これほどに素晴らしい才能が眠っていたのかという、大きな期待が持てましたので、来年もそのような才能をしっかり救い上げていけるようにしっかり選出したいと思います。

——— 今、思い返しますと、吉村先生（2021年）、芦澤先生（2022年）、そして昨年の平沼先生（2023年）。この3年間の審査を務められた先生方に、出展者説明会後の展示エスキースを行っていただくという修正案を加えていただいたことから、一段と展示内容に良い変化が表れました。

藤本：本当にそうでしたよね。エスキースをしてから、以降の展示効果は大きかったですね。

平沼：二巡目になっていますので次に10年ぶりの審査委員長を務めていただくのは、五十嵐淳さん。26年に向け、来年から藤本さんと一緒にエスキースを見ていただいて、今年の永山ディレ

クションを継ぐ展覧会へと導いてあげてください。

五十嵐淳：おお～、来春？もちろんやりましょう！

吉村：今年の出展者は本当に凄いなぁと思いました。OBJECTALは毛色が違った印象でしたが、あぁいったものはAIがないとできないですよね。だからこそ言葉で書いて、それを画像にしてみる、そして立体におこして3Dプリンターと施工を組み合わせる。何か凄い現象が起こりそうだな、と思って見ました。来年はこういう毛色の違う人たちにも、オリジナリティをもつ空気感を保ってほしい。

藤本：来年、セレクションする僕へのプレッシャーが高まりますね（笑）。

一同：（爆笑）

藤本：でも今年、平沼さん推薦のOBJECTALを永山さんがよく選ばれたなぁと、感心して見ました。

永山：そうですね。“多様な若手を選出する”という審査基準を設け、これまでの建築手法の継続性や社会的にコミットするばかりではなく、違った出発点の思想を持つ人たちがいた方が、多角的な議論が起こるのではないかと期待をしたのです。



藤本：まさに彼らがいたからこそ、今日は本当に良い議論になったと思います。

永山：OBJECTAL は個々に信じているものがあって議論中の受け答えが素晴らしいし、本気で建築を信じているんだ！という情熱が伝わりましたね。

平沼：池田さんの応答に、僕たちだけでなく聴講者の方々も良い意味で驚きましたよね（笑）。

藤本：（笑）目が本気でしたからね！ 倉方さんが、毛色が違うとはいえ繋がっているというコメントをされたのもすごく良かったですし、単に何かが違う人、ということではない部分が露呈されたようでよかったです。

芦澤：今年の選出者には良い意味のバラつきがあって、同じような方向性でなかったことがとても良かったのですが、それは本当に永山さんのセンスですよ。

永山：そうですね？でもお正月明けの選出の時に、平沼さんに本当にいろいろと助けていただきました！（笑）

芦澤：（笑）審査委員長の年のエスキースでは、僕もわりと積極的にやってみただけけれど、思い返すと結果的にもう少し辛口にやっても良かったのかなと思うのです。エスキースの段階で審査委員長だけではなくて、何人かで徹底的に揺さぶってみるとか（笑）。

一同：（笑）

永山：どこまでやっていいのかなというところもありますよね、さじ加減が難しい。

藤本：そうですね。僕は期待を込めて、KASA にはもう少し頑張っただけよかったなと思います。3年目の出展で周辺の物事に目を配った結果、方向性に何か迷いが生じたのか、もしくは慣れあい感がありました。

平沼：一昨年・伊東賞のクオリティの高い模型「ロシア館」、昨年・ゴールドメダル賞の原寸展示「ふるさとの家」を見ていましたから、さらに“これぞ我らの建築展！”という、まっすぐで圧倒的

な展示で新たな価値を示してくれるのではないかと、期待を寄せていたのですが。

芦澤：僕は個人的に石村さんがとても良いなと思いました。

平沼：吉村さんが質問したときに、石村さんが切実に答えていたのが、とても好印象でしたね。

藤本：しかし、石村根市も少しスパイ感があるよね。

永山：スパイ感ありました！（笑）結構スパイが潜んでいて、これが世に放たれると面白いなと思う。昔、私たちも自分の居場所を自分で見つけてこないといけない、とそんな感じでやっていたのかなって、思い返しました（笑）。

一同：（苦笑）

吉村：物質や材料が循環する、ストックのようでもありフローのような取り組みは、今後一般化が加速するリサイクルやリユースの現象。それを建築で提示するという事は、面白い視点だと感じました。一方で、材料の循環を活用している建築は凄くディティールを考えられていて、それ自体が美しい。ただ、その美しさに対して、総体として話していることがどこまで関係しているのかが僕にはイマイチわからなかった。現在地として、どのようなことが起こっていて、そ



れを“建築する”ということはどういうことなのかという、竣工後使われはじめた中間報告のところまで踏み込んだ総体があればよかったのだけれど、僕たちがそこに対して質問する機会がなかったのは少し失敗したなあ。

一同：うんうん。

吉村：現時点では、流通するマテリアルがどのように建築として顕在化しているのかを考えると、たまたまそこに置かれているに過ぎないし、途中経過の1つでしかない。それらが出会った状態が建築として浮かび上がっているという表現であり、その後もいろいろなものの関わりによって徐々に変化していくということ、人間の体も元素が入れ替わっているわけですから、そういうところに通じるような話もできたらうし、その流通先までリサーチがあったのかもかもしれませんが、もう少しそのようなことまで問題意識の中に入れて、図式化しようとされていれば好印象でしたね。

倉方：北千住という場所性だからこそ、あのような関係性を生み出せるんだと見せるには、もう一歩踏み込んで、その意識をもっと共有させてほしいです。



吉村：彼らが他の場所を選んでいた場合は、どうなるのかわからないですね。

永山：中中野もそうですね、その場所で活動している。

倉方：それらがスパイ活動ですね、いわゆる潜入捜査。場所に染まってみるというか（笑）。

藤本：皆、勇気がありますよね。よそ者がそこに根差すことには少し、怖さがあるではないですか。

永山：そうですね、徹底的にそこに潜んでやり続けるには忍耐力が必要です。しかしスパイ活動の先に、新たな建築の可能性があるのかなと思いました。

倉方：それを中野からホーチミンまでやっているのが今回の出展者世代ですね。「都会だから」「喜界島だから」と対立させてしまうことなく、ある種潜入、スパイのようにリサーチ活動をしているのですよね。

——— 五十嵐太郎先生、淳先生、本年の開催はいかがでしたでしょうか。

五十嵐太郎：“今、建築の可能性をあらためて議論する”とても良い機会になったと思いますが、欲を言えば、もう少し議論の時間があつたら良かったように思います。展示は相当洗練されていて、中中野プロジェクトでプリンの図面があつたことには驚きました。初めて見ましたから（笑）。それから KASA はドローイングの世界観が素晴らしいのですが、今回あまりなかったのがもったいない。井上岳さんは、展示デザインの知見を持ち、アーティストともコラボレーションしていますが、ホワイトハウスのプロジェクトを伝えるのは難しそうでした。

五十嵐淳：そうですね。しかし今年は本当に面白い回であつたと思いました。昔は大体、イライラして見ていたけれど（笑）、とても面白かったです。

平田：今回の議論の中で、石村根市があまり質問を受けていなかったことが気になりました。せめてもの救いは、彼らが発表したときにそれなりの質疑があつたこと。全く話す機会がない、質問がないという人がいる場合は、配慮してあげた方がいいように思います。

—— 2017年に、第1回目の「10会議」を発足し、本展のあり方を議論させていただく中で、出展者の選出方法として他薦である推薦枠を追加し、1他薦・推薦枠、2自薦・公募枠、3シード・指名枠との3枠といたしました。また2019年の開催中、ゴールドメダルを獲られた秋吉さんから、出展者世代の方が若手の同世代の存在を多く知っているとの助言をいただいたことから、今年も出展者の皆様から、それぞれ2-3名のお薦めリストをいただき、これを参考に、皆様から推薦される方を選出いただきました。来年の推薦者の簡単なご紹介を五十嵐太郎先生よりお願いいたします。

(1989年4月生まれ以降の方が応募可能・2025.3月末日時点で35歳以下)

【2025年推薦】審査委員長：藤本壮介

01. 五十嵐太郎 ●上野辰太郎

02. 倉方俊輔 ●房川修英 + 石田雄琉 | Brain Sauce Studio

03. 芦澤竜一 ●田代夢々 | ateliers mumu tashiro

04. 五十嵐淳 ●グリアー・ハナ・ハヤカワ | アキ・アーキテツツ ●石黒泰司 | ambientdesigns

05. 永山祐子 ●下田直彦 | カナバカリズ

○2024年 審査委員長のため不選出

06. 平田晃久 ●大須賀嵩幸 | リトー建築研究室

●石村大輔 + 根市拓 | 石村根市

07. 平沼孝啓 ●成定由香沙 | Studio Yukasa Narisada

●守谷僚泰 + 池田美月 | OBJECTAL ARCHITECTS

08. 藤本壮介 ○2025年 審査委員長のため不選出

●加藤麻帆 + 物井由香 | 加藤物井

09. 吉村靖孝 ●下寺孝典 | TAIYA

●山川陸 | 山川陸設計

【2023年推薦】審査委員長：平沼孝啓

01. 五十嵐太郎 ●福留愛 | iii architects

●佐々木慧 | axonometric

02. 倉方俊輔 ●大村高広 | GROUP

●石黒泰司 | ambientdesigns

03. 芦澤竜一 ●大野宏 | Studio on site

○2022年 審査委員長のため不選出

04. 五十嵐淳 ●竹内吉彦 | t デ

●森恵吾 + 張婕 | ATELIER MOZHI

05. 永山祐子 ●久米貴大 | Bangkok Tokyo Architecture

○不選出

06. 平田晃久 ●菅田侑志 | ULTRA STUDIO

●西倉美祝 | MACAP

07. 平沼孝啓 ○2023年 審査委員長のため不選出

●Aleksandra Kovaleva + 佐藤敬 | KASA

08. 藤本壮介 ●小林広美 | Studio mikke

●杉山由香 | タテモノトカ

09. 吉村靖孝 ●小田切駿 + 瀬尾憲司 + 渡辺瑞帆 | ガラージュ ●甲斐貴大 | studio arché

上記の他薦・推薦枠より2-4組、自薦・公募枠により2-4組、

●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。

五十嵐太郎：今回はまったく面識のない人を推しました。上野辰太郎さんという、東京都市大学を卒業して、今年のSDレビューに出ていた方です。若いので、実作はあまりないと思うのですが、雑居ビルを再編するというプロジェクト。正直、まだ深く内容を理解できていないのですが、プレゼンテーションの模型やダイアグラムが独創的だったので、表現の可能性を感じて選ばせていただきました。

倉方：Brain Sauce Studioを推薦します。仕事幅が広く、リノベーションの仕方が面白くて興味を持っていたのですが、村野藤吾さんの晩年の作品である八ヶ岳美術館を見に行った際、メンバーの1人の石田雄琉さんが村野さんの建築を独自の視点で撮影したり、八ヶ岳美術館の模型もつくられていて、実際にご自身の設計の仕事と他者を観察するというのがどうつながっているのか、興味を持ちました。

芦澤：田代夢々さんです。万博でトイレのデザインをされています。彼女が何を考え、具体的に何に興味を持ってつくっているのかを詳しく知らないのですが、一度お会いした時に、良い意味で変な人だな（笑）と思ったので話を聞いてみたいと思ったことと、作品にも興味があったので推薦しました。

五十嵐淳：今回は、あまり建築一筋ではない人を選びたいなと思っていましたから、グリアー・ハナ・ハヤカワさんを選びました。きっと面白いと思います。



永山：カナバカリズです。まだ住宅が大半なのですが、独特の世界観で住宅をつくっている。特にシロクマハウスという作品が良かったのと、あとは不思議な神棚の制作にも興味をそそられます。

五十嵐淳：あの神棚かっていいよね。素晴らしいと思いました。

永山：いいですね。神社がくっついているような精巧で不思議な神棚。神社がそのまま浮いているような設えからも、センスがあって面白そうなので選びました。

平田：大須賀嵩幸さんという、平田研出身の方です。博士過程にいたのだけれど途中で辞めて1人でやっておられます。平田研時代は北大路ハウスという建築学生のシェアハウスを担当していて、その後は砂木というところで活動し、今度は小豆島ハウスというプロジェクトを今も小豆島に住んでやっているようです。現在では、小豆島の役所からきた仕事もやっているようで、新しい建築の可能性を発見できるのではないかと感じて選びました。

倉方：また、潜入している感がありますね（笑）。

一同：アハハ。（笑）

平沼：東京藝術大学大学院を出たばかりの、成定由香沙さんを推します。建築の実績はまだ何もな



いに等しいですが、ウェブにある1枚の写真の繊細な表現、情景の儚さに興味を惹かれました。秘めた可能性があるように感じます。時代の流れにも恵まれているといえるのでしょうかし、本展でのおそらく最年少？となる挑戦に期待をかけてみます。

藤本：写真もやっている人ですね。アーティストと建築の間。不思議な立ち位置の人ですね。

平田：おそらく中山英之研出身の方ですね。展覧会で成定さんに写真を撮ってもらったことがあります。

平沼：おっ、皆さんご存知なのですね。ご本人のことは知らなかったのですが、物事を捉え表現するセンスが良いのと、もしかすると本当は建築を凄くやりたいように思いましたので推しました。

吉村：2020年ゴールドメダリストの山田紗子さんも写真を彼女に撮ってもらっていると思いますよ。僕は修士設計展で知りました。

五十嵐淳：アイデアコンペの審査をやっていた時に、アニメーションを流して一言もプレゼンせずに終えたのが印象に残っています。

平沼：へえ、皆の印象に残るくらいですから、大物新人かもしれませんね（笑）。

吉村：僕は、屋台でこれほどのバリエーションが出てくるのかと思うくらい、いろいろやっているTAIYAの下寺孝典さんを推薦しました。

平田：移動系をずっとやっていく覚悟が表われている名前ですね。

吉村：そうそう（笑）。

—— 皆様ありがとうございます。この他薦・推薦枠より2-3組、自薦・公募枠により2-3組、前年のGOLDMEDAL受賞者のシード枠希望がありましたら2組を含め、計7組を、来年の審査委員長、藤本先生に選出いただけます。選考時のお相手は、平沼先生にお願いいたします。そして若手を応援し、これからの若い世代に「建築への興味」を抱いていただこうと、各先生方による展覧

会会場でのイブニング・レクチャーを導入いただきました。当初は、大阪駅前という地方都市を代表する駅前での開催を継続するため動員数を増やす目的ではじめましたが、楽しみに来られる来場者もおられますので、来年も引き続き開催したいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。そして本展と所縁の深い万博開催がいよいよ来年に迫りました。本展の出展者を含む若手建築家の提案を、吉村先生、平田先生そして藤本先生がコンペにて選出され、小規模施設をつくれます。'70より継がれた'25万博は「建築の博覧会」としてどのような開催になるのか、藤本先生より、是非本展の誌面を通じて、可能な範囲でお話をご共有いただけないでしょうか。

藤本：これから先の50年をつくっていくのは本展に出展される若手建築家たちですので、本展・U-35出身者の若手建築家がすごく頑張ってくれた、20組のプロジェクトも見どころになると思います。またもちろん大きな木造リングや、伊東さんの大催事場、平田さんの小催事場、永山さんの2つのパビリオンなど、各国パビリオンも多くの建築家たちが携わるパビリオンがあります。大型の博覧会としては、日本では50年に一度、何が起るか本当にわからない取り組みですが、ぜひ建築を目指す人たちは、万博という出来事や歴史を知る意味で体験すべきものという認識でいてほしいです。

永山：勝手に他の媒体が進めてしまうと伝わり方が違ってしまうこともありますから、ここにいるような建築家史家たちが建築ツアーをやるのがいいですよ。

平田：でも協会は、建築のレイヤーをしっかりと見せるということはあまり考えていない様子です。だからきっと、僕たちの側から何かやった方が面白くなると思います。

平沼：本展（公募選出による若手建築家の展覧会）の姉妹事業のように取り組む、建築学生ワークショップ（公募選出による地域滞在型の学部生院生対象）は、万博開幕の2日後の4月15日から会場で始動し、万博閉幕の1か月前、9月15日まで開催します。の中で並走していただく文化庁と共に、会場内のパビリオン建築（約170個）の建築の展覧会を計画しています。とても暑い時期ですが、皆さんの建築ツアーを計画するというのはいかがでしょうか。

藤本：パビリオンを巡る建築ツアー！もいいですね、そして博覧会に合わせた建築のシンポジウムもたくさんやりたいですね！

一同：（大拍手）

——— 最後になりましたが、今後本展へ応募をしてくる若手の方々や、出展を目指そうとする学生に向けて、メッセージをいただけないでしょうか。

平田：今年一番の感動は、自分たちが建築を考えていたのとは違うアプローチで建築を考え始めている人たちがいて、自分たちも刺激を受けて、何か変化していくのではないかと感じたことです。また、U-35の方たちの世代下、今の学生の人たちはさらに違う概念を持っているかもしれない。その何かをこの展覧会という機会を通して、自分の中ではっきりさせられたり、一緒に議論できることは素晴らしいことだと思っています。実際にU-35出身者が、万博やいろんな場で建築家として活躍しているのを見て、独立している人たちは、是非勇気を出して応募してほしいと思います。

五十嵐淳：若いついていいなと思いました（笑）。正直、さっぱりわからないものが出てきたほうが面白い。それを狙ってくるということではなく、自然にそういう人が現れると、もっと本展は面白くなってくると思います。

平田：ガラージュも、なぜあそこまでするのかさっぱりわかりません（笑）。

一同：（笑）



藤本：単純に自分の想像の延長線上で理解できる範疇ではもはやなくなっています。それが U-35 の面白い点だし、今回の旧約聖書の読み方、考え方をあらためて気づかされたことでも、かっこよかった。

五十嵐淳：自分たちの聖書をつくらうとしているという姿勢はかっこいいなと思いましたね。そういう人がたくさん出てくるといいけれど、来年は藤本さんが選ぶわけなので、フィルターが重要になってくるわけではないですか。ですが、偏っていても面白いかもしれない。全員藤本さんのような人でもすごく面白いと思う（笑）。そこに審査委員長が 1 人で決めるという面白味があると思います。

一同：（爆笑）

五十嵐太郎：日本はプリツカ一賞受賞者が世界最多国になり、世界から非常に高く評価されている一方で、国内では建築家はとにかく叩かれているという引き裂かれた状況です。自国評価と世界評価のズレで若手も悩むことがあるだろうと思うのですが、僕はせんだいデザインリーグなどで審査するとき、完全にわからないものを選ぶことが多い。淳さんが言ったように、自分の価値観を更新してくれるような作品に出会うことが、審査をして一番面白い瞬間でもあります。自分の趣味をただ確認するというよりも、むしろわからないものに触れたことで、世界の見え方が変わるような、そのようなものを是非ぶつけていただけると嬉しいです。

藤本：どうか“藤本らしいもの”は絶対に出さないようにしていただいて（笑）。

一同：（爆笑）

—— 皆さま今日は、終日にわたり、誠にありがとうございました。今日は、展覧会会場での視察にはじまり、4 時間余りのシンポジウムの後、この会議の場にご参加いただき、貴重なご意見をいただけて心より感謝申し上げます。最後となりましたが、来年のシンポジウムは、2025 年 10 月 18 日土曜日と決定しておりますので皆さま、16 年目の開催もどうか引き続きよろしく願いいたします。また本年の開催について、良いことも、良くないことも含めて話題にいただければともうれしく思います。この後の会期中、是非 SNS などを通じて応援をいただけますと幸いです。それではビールをお待たせいたしました！出展者の皆様がお待ちでございます。この後、出展者へ

の労いと、励みのお言葉を掛けてあげてください。今日は、誠にありがとうございました！

一同：（大拍手）ありがとうございました！

2024 年 10 月 19 日

大阪・梅田 グランフロント大阪 北館 4 階 ナレッジシアター・控室



U-35 2024シンポジウム会場の様子